

2018（平成30）年5月22日

姉妹都市活動室（Ibaraki Intercultural Network IIN）の誕生について

1978（昭和53）年の1月、茨木市は市制30周年を迎えました。ルービック・キューブが大流行していた頃のことです。市が記念事業を検討する中で「茨木市も今や中堅都市。国際都市の仲間入りをしては」という声が市民の間に高まり、市は「海外姉妹都市提携事業」を企画、広く市民の賛同を得たうえで2年後の1980（昭和55）年10月、米国ミネソタ州のミネアポリス市（以下ミ市）との姉妹都市提携を実現させました。people to peopleの理念のもとに「市民が主体になること」が基本に据えられ、「両市間における市民文化の交流を深め、理解と連帯を密にし、相互の友好親善と市民外交の促進を図り、両国の友好親善に寄与する」ことが目的とされました。当時、茨木市にミスター・ドーナツの店がいくつかあり、この事業の本社がミ市にある国際的な食品会社だったことが縁になりました。

茨木市は新聞を通じて姉妹都市提携を発表すると同時に、姉妹都市協会（86年から茨木市国際親善都市協会に発展）の会員を募集しました。発足間もないころに応募し、36年を経た現在も活躍中の方に、初代委員長ら数人がおられます。これらメンバーたちは翌81年、ミ市からの訪問団が来茨した際、通訳などで両市の親善交流を支援しました。訪問団が帰国後、解散の話も一部にありましたが、「それは惜しい」と有志で勉強会を立ち上げ82年5月、「茨木市姉妹都市活動室」が誕生。月二回の例会を開き、ゲストスピーカーを探し、会費も定めるなど現在につながる形が生まれました。

その後、同活動室のメンバーたちは「自分たちの活動のためだけでなく、青少年の英語学習の励みにするためにも」と考え、中・高校生による英語のスピーチコンテストの実施を姉妹都市協会に提案、早々に賛同を得て1984（昭和59）年11月、第一回のコンテストが開催されました。メンバーたちはコンテストの主任ジャッジを関西外大の教授に依頼するとともに、当時英語での呼称がなかった姉妹都市活動室の名前をどうするか相談、「Ibaraki Intercultural Network 略称IIN」との提案を受け、決定しました。

両市長とも大変、親善活動に熱心で、姉妹都市提携後10年ほど活発な交流が続きしました。両市の少年・少女らによる野球、サッカー、バスケットなどスポーツで、少年合唱団や茶華道など文化活動で、さらにホームステイなどでの交流もありました。多忙な日々が続きましたが「とにかく、みんなで助け合って乗り切りました」ということです。



1991年初め、バブル経済が崩壊し、“繁栄の10年”と言われた1980年代が終わると交流活動は全国的に一時、縮小傾向になりました。しかし、IINではその後も地道に活動を続け、現在では、IINに設けられている8つの分科会活動を通じて、各国の友人・知人、留学生、開発途上国からの研修生などと親善交流を続け、その輪を拡げています。

以上